

『法華論』版本の研究

——清水梁山国訳『法華論』の底本を視点として——

桑 名 法 晃

はじめに

筆者は金炳坤氏との共同研究において、これまでに『法華論』末疏の一つである『法華經論述記』について研究を行い、その成果を左の如くすでに発表している。

- (一) 「義寂釈義」一撰『法華經論述記』の文献学的研究(1) (『身延山大学仏教学部紀要』第一五号、二〇一四年一月) (以下、研究(1)と記す)
- (二) 「義寂釈義」一撰『法華經論述記』の文献学的研究(2) (『身延論叢』第二〇号、二〇一五年三月)
- (三) 「義寂釈義」一撰『法華經論述記』の文献学的研究(3) (『法華文化研究』第四一号、二〇一五年三月)
- (四) 「義寂釈義」一撰『法華經論述記』の文献学的研究(4) (『身延山大学仏教学部紀要』第一六号、二〇一五年一月)

この中、研究(1)において、『法華論』冒頭の構成について左の表を用いて少しく考察を行った。⁽¹⁾

『法華論』版本の研究(案名)

構成		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
I 前序	なし	①	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし
II 婦敬偈(頂礼正覚海 浄法 無為僧……)	言及なし	○	なし	①	①	①	①	①	①
III 経曰婦命一切諸仏菩薩	①	言及なし	なし	なし	②	②	②	③	なし
IV 序品第一 / 妙法蓮華経序品 第一	言及なし	言及なし	なし	②	なし	なし	なし	なし	なし
V 如是我聞……	言及なし	言及なし	①	③	③	③	②	なし	なし
VI 此「経」法門……	言及なし	言及なし	②	④	④	④	④	④	②

①、②とは、吉蔵『法華論疏』にて説かれる二種のテキストを、「摩提訳」、「留支訳」は、それぞれ『大正新脩大蔵経』所収の現行本『法華論』勒那摩提訳、菩提留支訳を、『論疏』、『子注』、『述記』、『論記』は、それぞれ吉蔵『法華論疏』、円弘『妙法蓮華経論子注』、義寂釈義一撰『法華経論述記』、円珍『法華論記』を指し、そこに引用される『法華論』冒頭の構成を、その順序に従い①から④の数字によってまとめたものである。詳細については研究(1)を参照されたいが、ここでは、現行の二訳には見出すことのできないⅢの一文「経曰婦命一切諸仏菩薩」を『法華論』末疏の一部が有すること、さらに、清水梁山氏の国訳(以下、清水国訳と記す)²⁾にはこの一文が訳されていることを指摘した。これは、現行のテキストとは少しく異なる『法華論』の存在を窺わせるものであるが、研究(1)の時点では、それ以上の言及は避けた。その後研究を進める中で、Ⅲの「経曰婦命一切諸仏菩薩」の一文を有する『法華論』菩提流支訳の版本の存在を知り、その調査を行った。

この版本については、すでに塩田義遜氏によって、左の如く指摘されている。

法華論は古来より二本が伝へられたのであるが、後世別行本として一二本のあったことは明らかである。その一本は「寛文九己酉正月吉辰、法華宗門書堂板」の三十二紙の一卷で、此本は開巻の初に『法華論、婆藪槃豆此云天親菩薩造』とあり、次の行に『妙法蓮華經優婆提舍、三藏法師菩提流支奉詔訳』とあり、更に帰敬頌を掲げ流支本は次に『妙法蓮華經序品第一』とあるが、別行本には『経曰帰命一切諸仏菩薩』と重ねて帰敬頌を掲げて居るのである³⁾。

後述するように、清水梁山氏は「国訳法華論開題」において菩提留支訳を底本とした旨を述べているが、このⅢの一文は現行本のみならず、確かめ得る諸版本においても見出すことはできない⁴⁾。清水国訳の特徴であるといえる。それはすなわち、清水梁山氏が国訳に用いた底本がこのⅢの一文を有する「法華宗門書堂」版の『法華論』菩提流支訳であった可能性を示唆するものでもある。

寛文九年刊行の「法華宗門書堂」版については、高麗蔵への高い評価からも、従来の『法華論』の研究においてそこに十分な関心が向けられてきたとはいえない⁵⁾。だが、本版本について、前掲の『法華論』末疏が依拠した、現行本とは異なる系統のテキストとの関連をも視野に入れて考察を進めることは、『法華論』テキストの研究においても少なからず資するところがあるものと考えらる。

よって、本稿においては、まず大蔵経所収のテキストとは少しく異なる版本が近世日本においてどのように流布し

ていたのか、『法華論』の流布の問題を整理し、さらに近代初頭においてそれがどのように受容され研究されていたのか、清水梁山氏の「国訳妙法蓮華經優婆提舍」に視点をあてて考察を試みたい。

一 Ⅲの一文を有する版本『法華論』

本稿で扱う版本『法華論』の書誌は左の通りである。

(一) 身延山大学図書館所蔵『法華論』一巻二冊

貴重本書庫 坂本文庫 資料番号三(棚番一八一—二)

袋綴、新たに表紙が付され、元の表紙には題簽剝落痕があり、同箇所「妙法蓮華經 全」と墨書される。分量は全体二六・六×一九・三。内題は「法華論 婆藪槃豆〈此云／天親〉菩薩造」、「妙法蓮華經優婆提舍 〈三藏法師菩提／流支奉詔訳〉」。版心は白口双花口魚尾「法華論 (丁数)」。本文は四周单边無界、一〇行二〇字、漢文、返点・送仮名あり。丁数は三三丁。刊記は卷末三三丁裏に左の如くある。

正保三^丙
戌 曆 晚秋吉日 刊摺之

なお、身延山大学図書館には、正保三年版の版本がもう一本所蔵される。

架蔵番号 (函) AC 38 (部) 三、2 (号) C 559 (冊) A 1

身延山大学古典籍配架目録(貴重本) 資料番号一五〇(貴重本書庫 棚番一四一八)

法量は全体二六・八×一九・五。外題は欠。但し、左肩無辺題簽あり。題簽は十九・四×四・三。そのほかは全て右の通りである。

(二) 立正大学図書館所蔵『法華論』一巻一冊

資料請求番号一八三・三一Te—三五

袋綴、法量は全体二六・四×一八・五、題簽一八・九×三・六。外題は左肩双辺題簽に墨書「法華論 全」。内題は「法華論 婆藪槃豆〈此云／天親〉菩薩造」、「妙法蓮華経優波提舍 〈三藏法師菩提／流支奉詔訳〉」。版心は白口双花口魚尾「法華論 丁数」。本文は四周単辺無界、一〇行二〇字、漢文、返点・送仮名あり。丁数は三三二丁。刊記は卷末三三二丁裏に「藤田宗繼」とのみある。

(三) 身延山大学図書館所蔵『法華論』一巻一冊

身延山大学図書館所蔵古典籍目録(三論) 資料番号六一

袋綴、法量は全体二七・一×一九・一、題簽一八・三×三・四。外題は左肩双辺題簽に「法華論 全」。内題は「法華論 婆藪槃豆〈此云／天親〉菩薩造」、「妙法蓮華経優波提舍 〈三藏法師菩提／流支奉詔訳〉」。版心は白口双花口魚尾「法華論 丁数」。本文は四周単辺無界、一〇行二〇字、漢文、返点・送仮名あり。丁数は三三二丁。刊記は卷末三三二丁裏に左の如くある。

『法華論』版本の研究（桑 名）

武村市兵衛昌常

法華宗門書堂 村上勘兵衛元信

寛文九己酉年 山本平左衛門常知

正月吉辰 八尾甚四郎友春

なお、身延山大学図書館には、寛文九年版の版本がもう一本所蔵される。

身延山大学図書館所蔵古典籍目録（天台宗）資料番号四六六

本版本は外題を欠く。法量は全体二六・三×一八・八。そのほかは右の通りである。

なお、本稿は、望月海慧・金炳坤編著『婆數繫豆菩薩造法華論』法華經研究叢書Ⅱ（身延山大学東洋文化研究所、二〇一六年三月）に転載される予定である。『法華經研究叢書Ⅱ』においては、前掲の（一）身延山大学図書館所蔵

『法華論』（正保三年刊記本）は全編を、（二）立正大学図書館所蔵『法華論』（藤田宗継版）、並びに（三）身延山大学図書館所蔵『法華論』（寛文九年版）は刊記のみを写真版にて掲載する予定である。併せて参照されたい。

（一）（二）（三）の版本についてみると、本文・版式は全て同じであり、刊記は異なるものの、その部分のみ埋め木していることから、三つとも同じ版であることがわかる。

この中、寛文九年刊行の「法華宗門書堂」版については、冠賢一氏によってすでに詳細な研究がなされている。今は冠氏の研究を基として、寛文九年版に至る『法華論』の板木譲渡の流れを確認し、刊行年次が記されていない藤田宗継による出版がどの時期に位置づけられるかを明確にしておきたい。この間の、特に「法華宗門書堂」版刊行に関

わる事情について、左の点を挙げる事ができる。

- ・寛文九年版は寛文八年極月二日に京都書肆藤田了竹（庄左衛門）から買い取った板木であること。⁶
- ・藤田家が以前から所持していた板木ではなく、寛文八年以前に藤田家が買い集めたものであること。また、買い集めはしたが、藤田了竹（庄左衛門）の刊記を以て出版はされていないこと。⁷
- ・書商藤田宗継は藤田了竹の一族と考えられるが、宗継も寛文四年（一六六四）以降、理由は不明であるが出版活動を中止していること。⁸

・藤田了竹が「四軒仲間」（武村市兵衛昌常、村上勘兵衛元信、山本平左衛門常知、八尾甚四郎友春）に売った板木の中に、かつて藤田宗継が所持していた多くの板木も共に「四軒仲間」に売られていること。⁹

さらに、これらのほかに、「寛文九・十年の「法華宗門書堂」版として出版される前の出版元及び刊行年次を確認しえたもののみ記した」¹⁰図表の中、『法華論』の項目では、「（寛永二）↓（正保三）」¹¹と記し、寛永二年の叡山版と正保三年版は寛文九年版と同版であることを冠氏は指摘している。

以上のことから、まず藤田宗継版は、正保三年版と寛文九年版との間に位置づけられ、これら三つは同一の板木を用いていたことがわかる。すなわち、この菩提流支訳の版本『法華論』は、正保三年↓藤田宗継↓寛文九年と刊記部分のみを埋木して出版されたことが確認できるのである。だが、ここでさらに検討すべきは、冠氏によってこれらと同版として指摘されている寛永二年版の存在である。

寛永二年版の版本については、近年出版された『江戸時代初期出版年表』において、左の如く記されている。¹²

◎法華論（叡山版） 一卷一冊

〔著者〕天親造、（唐）玄奘訳

〔刊記〕寛永二乙曆 晚秋吉日 刊摺之

〔所蔵〕叡山天海蔵一・三・五六。同真如蔵四―一。同寿量院一三三。日光天海蔵一六六

〔備考〕尾題「妙法蓮華経論」

「◎」は活字であることを意味しているが、本年表においては、「玄奘訳」と記載していることに注意を引かれる。本項目は、実見において確認されたものであり、かつ先行書籍で刊記等の紹介がなされているものであるから、先行研究をあたっていくと、夙に長澤規矩也氏によって左の如くその書誌が紹介されていることが確認できる。¹⁴⁾ 先行

○法華論「唐釈玄奘訳」 寛永二刊 大一冊 日166天56華772頁135

十行二十字、大黒口、花口魚尾、単返、無界。

第一種G活字使用。卷末に

寛永二乙曆 晚秋吉日 刊摺之

右年表よりやや詳しく、版式の情報をも記しているが、ここにおいても右年表と同じく「玄奘訳」と記されていることがわかる。また、版心が「大黒口」という点において、正保三年版以降の版本とは異なりがみられる。

そこで、叡山文庫所蔵の天海蔵（内典一―三―五六）、真如蔵（内典四―一―三三五）、寿量院蔵（内典六一―一―三二二）、華藏院蔵（内典六一―一―七七二）を調査したところ、訳者については右に「唐釈玄奘訳」と記したのは誤りで、正保三年版以降の内題と同じく、「法華論 婆藪槃豆（此云／天親）菩薩造」、「妙法蓮華経優波提舍（三蔵法師菩提／流支奉詔訳）」とあった。また、右叡山文庫所蔵の寛永二年版は何れも返点・送仮名はなく、匡郭二三・三×一六・一であり、正保三年版の匡郭二二・九×一六・二とは差異がみられた。ただ、行数・字数は同じであり、丁数も変わらない。したがって、正保三年版は、古活字本である寛永二年版を底本として、整版本として新たに返点・送仮名を付して覆刻されたものと考えられる。古活字本から整版本への移行は、概して正保・慶安頃を境としてみられ、これは、慶長・寛永の時期は書籍の需要が少ないため、同一の活字を組版して繰り返し使用するのが経済的に有利であったが、やがて書籍の需要が増加して、受容者の増大と急の要求とに應ずるには、むしろ整版による方が経済的に有利になったからであるといわれている。⁵⁵ この移行時期に合致するように『法華論』についても、まさに正保三年に、古活字本から整版本への移行が確認できるのである。

実見により右のことを確認できたが、寛永二年版が如何なる系統の『法華論』に依拠したものか、その底本については未詳であり、今後さらなる検討を要するものである。

なお、『法華経研究叢書Ⅱ』においては、この寛永二年版全編を写真版にて掲載する予定である。前掲の版本と共に併せて参照されたい。

以上のことから、嘉興蔵の覆刻である鉄眼版が大蔵経としては近世日本において流布していたが、一方ではそれは構成・本文を少しく異にする菩提流支訳の版本『法華論』が、管見の限り「寛永二年版（一六二五）↓正保三年版

（二六四六）↓藤田宗繼版↓寛文九年（二六六九）版」と、寛永二年版以降覆刻され、刊記を変えて繰り返し刊行されていたことがわかるのである。⁽¹⁶⁾

二 清水国訳との関連について

右の書誌の整理から、近世日本においては流布版の鉄眼版大蔵経『法華論』のほかに、寛永二年版より寛文九年の「法華宗門書堂」版に至る菩提流支訳の版本『法華論』が流布していたことがわかった。後者のそれは現に身延山大学のみならず、立正大学にも複数伝わっていることが確認できる。⁽¹⁷⁾

そこで、清水国訳と本版本との関連について考察を進めていくにあたって、まず、清水梁山氏の国訳に対する態度をみておきたい。

まず、清水梁山氏は、「国訳法華論開題」において左の如く断っている。

今の国訳は主として第二訳の本に拠れども亦第一訳をも参照し、及び更に二本の異本をも考へて、務めて意義の
通利なるものを取れり。覽む者諒せよ。⁽¹⁸⁾

ここでいう、「第二訳」とは、『法華論』の翻訳に第一次、第二次の翻訳の二本ありとして挙げられたうちの菩提留支訳を、「第一訳」とは勒那摩提訳を指しており、⁽¹⁹⁾清水梁山氏は菩提留支訳を底本としながらも、勒那摩提訳をも参照し、さらに異本をも考慮に入れた上で、理解に資すべく努めたと述べている。したがって、清水梁山氏は少なくとも

三種以上のテキストを校合し、国訳をなしたことがわかる。だが、清水梁山氏が依拠した「第一訳」、「第二訳」が直ちに大蔵経所収のテキストを指すものであるか、また、ここでいう異本が具体的に何を指すかは不明である。ただ、『法華論』に両訳あることを述べたことに続けて、「本論の翻訳は此の二本にして与に現に大蔵に在り」⁽²⁰⁾と言及していることから、大蔵経所収の両訳が念頭にあったことがわかる。清水国訳が収録されている『国訳大蔵経 論部第五卷』の刊行年次（一九二二年）から考えれば、ここでいう「大蔵」とは、近代において日本で編纂された『大日本校訂大蔵経』（以下、『縮刷蔵』と記す）⁽²¹⁾、『日本校訂大蔵経』（以下、『改正蔵』と記す）⁽²²⁾までが該当する可能性を有するものといえる。

ただ、清水梁山氏の『法華論』についての研究はこの国訳が初出ではなく、『国訳大蔵経 論部第五卷』の刊行から遡ること数年、左の二本の論文を発表している。

(一) 「天親の法華経観」(『大崎学報』第三八号、一九一五年二月)

(二) 「天親の法華経観(続前)」(『大崎学報』第三九号、一九一五年五月)

(一) の論文では、国訳と同様、『法華論』に二本ありとして、菩提留支訳の二卷本と勒那摩提訳の一卷本とを挙げ、「此の二本は大同少異なるを以て、今は専ら二卷の本に拠りて其の概要を述ぶべし」⁽²³⁾と、菩提留支訳に依拠することを明記している。菩提留支訳を底本としたことは、国訳と同一であるが、他の対校テキストについては触れておらず、専ら菩提留支訳に拠るとした点において、国訳におけるテキストの用い方とは異なっている。清水梁山氏は右両論文

において、『法華論』本文を引用しながら解釈を加えていることから、それらの文を列挙すると左の如くなる。なおここでは、本文は正字を用い、『法華論』本文の順序に従って列挙した。また、本文の下には、論文の頁数を示した。

如來欲說法時至成就者。爲諸菩薩說大乘經故。此大乘修多羅有十七種名。顯示甚深功德應知。何等十七。云何顯示。一名無量義者。成就字義故。以此法門說彼甚深法妙境界故。彼甚深法妙境界者。諸佛如來最勝境界故。二名最勝修多羅者。於三藏中最勝妙藏。此法門中善成就故。三名大方廣經者。無量大乘門中善成就故。隨順衆生根住持成就故。四名教菩薩法者。以爲教化根熟菩薩隨順法器善成就故。五名佛所護念者。以依如來有此法故。六名一切諸佛祕密法者。此法甚深唯佛知故。七名一切諸佛之藏者。如來功德三昧之藏在此經故。八名一切諸佛祕密處處者。以根未熟衆生等非受法器不授與故。九名能生一切諸佛經者。聞此法門能成諸佛大菩提故。十名一切諸佛之道場者。以此法門能成諸佛阿耨多羅三藐三菩提非餘修多羅故。十一名一切諸佛所轉法輪者。以此法門能破一切諸障礙故。十二名一切諸佛堅固舍利者。謂如來眞實法身於此修多羅不敗壞故。十三名一切諸佛大巧方便經者。依此法門成大菩提已爲衆生說天人聲聞辟支佛等諸善法故。十四名說一乘經者。以此法門顯示如來阿耨多羅三藐三菩提究竟之體。彼二乘道非究竟故。十五名第一義住者。以此法門即是諸佛如來法身究竟住處故。十六名妙法蓮華經者。有二種義。何等二種。一者出水義。以不可盡出離小乘泥濁水故。又復有義。如彼蓮華出於泥水喻。諸聲聞得入如來大衆中坐。如諸菩薩坐蓮華上。聞說如來無上智慧清淨境界。得證如來深密藏故。二華開義。以諸衆生於大乘中其心怯弱不能生信。是故開示諸佛如來淨妙法身令生信心故。十七名最上法門者。攝成就故。攝成就者。攝取無量名句字身。有頻婆羅阿閼婆等偈故。此十七句法門是總。餘句是別如經爲諸菩薩說大乘經。名無量義如是等故。（六

一五頁)

舍利弗。唯佛如來知一切法。舍利弗。唯佛如來能說一切法。何等法_句、云何法_句、何似法_句、何相法_句、何體法_句、何等_句、云何_句、何似_句、何相_句、何體_句。如是等一切法如來現見非不現見。(一六頁)

言甚深者。顯示二種甚深之義應如是知。何等爲二。一者證甚深。謂諸佛智慧甚深無量故。二者阿含甚深。謂智慧門甚深無量故。(一八頁)

與二種法令彼成就。何等爲二。一與證法。二與說法。一與證法令成就者。謂依證法而授與故。二與說法令成就者。謂依說法而說與故。(一八頁)

言譬喻者如依牛故。得有乳酪生酥熟酥及以醍醐。此五味中醍醐第一。小乘不如其猶如乳。大乘爲最猶如醍醐。此喻所明大乘無上。諸聲聞等亦同大乘無上義故。聲聞同者。此中示現諸佛如來法身之性同。諸凡夫聲聞之人辟支佛等。法身平等無差別故。(二八一—一九頁)

又依證法復有五種。一者何等法。二者云何法。三者何似法。四者何相法。五者何體故。何等法者。謂聲聞法辟支佛法諸佛法故。云何法者。謂起種種諸事說故。何似法者。依三種門得清淨故。何相法者。謂三種義一相法故。何體法者無二體故。無二體者。謂無量乘唯一佛乘無二乘故。(一七頁)

以上が(一)所引の文である。以下は(二)所引の文となる。

第一人者。示世間中種種善根三昧功德方便令喜。然後令人大涅槃故。第二人者。以三爲一令人大乘故。第三人者。

令知種種乘諸佛如來平等說法。隨諸衆生善根種子而生芽故。第四人者。方便令入涅槃城故。涅槃城者。所謂諸禪三昧城故。過彼城已。然後令人入涅槃城故。第五人者。示其過去所有善根。令憶念已。然後教令人入三昧故。第六人者。說大乘法。以此法門同十地行滿。諸佛如來密與授記故。第七人者。根未淳熟爲令熟故。如是示現得涅槃量。（二二頁）

問曰。彼聲聞等。爲實成佛故與授記。爲不成佛與授記耶。若實成佛。菩薩何故於無量劫修集無量種種功德。若不成佛云何與之虛妄授記。答曰。彼聲聞等得授記者。得決定心非謂聲聞。成就法性如來。依彼三種平等說一乘法。以佛法身聲聞法身平等無異故與授記。非即具足修行功德。是故菩薩功德具足。諸聲聞人功德未足。（二〇頁）

言聲聞人得授記者。聲聞有四種。一者決定聲聞。二者增上慢聲聞。三者退菩提心聲聞。四者應化聲聞。二種聲聞如來授記。謂應化者。退已還發菩提心者。若決定者增上慢者二種聲聞。根未熟故不與授記。菩薩與授記者。方便令發菩提心故。（一七頁）

又依何義。佛說三乘名爲一乘。依同義故。授諸聲聞大菩提記。言同義者。以佛佛法身聲聞法身彼此平等無差別故。以諸聲聞辟支佛等乘不同故有差別。以彼二乘非大乘故。（二二頁）

八者示現成大菩提無上故。示現三種佛菩提故。一者示現應佛菩提。隨所應見而爲示現。如經皆謂如來出釋氏宮去伽耶城不遠坐於道場得成阿耨多羅三藐三菩提故。二者示現報佛菩提。十地行滿足得常涅槃證故。如經善男子我實成佛已來無量無邊百千萬億那由他劫故。三者示現法佛菩提。謂如來藏性淨涅槃常恒清涼不變等義。如經如來如實知見三界之相次第乃至不如三界見於三界故。三界相者。謂衆生界即涅槃界。不離衆生界有如來藏故。無有生生死若退若出者。謂常恒清涼不變義故。亦無在世及滅度者。謂如來藏真如之體。不即衆生界。不離衆生界故。非實非虛

非如非異者。謂離四種相。有四種相者。是無常故。不如三界見於三界者。謂佛如來能見能證真如法身。凡夫不見故。是故經言如來明見無有錯謬故。我本行菩薩道今猶未滿者。以本願故。衆生界未盡願非究竟故。言未滿非謂菩提不滿足也。所成壽命復倍上數者。此文示現如來常命善巧方便顯多數故。過上數量不可數知。我淨土不毀而衆見燒盡者。報佛如來真實淨土。第一義諦之所攝故。(四一五頁)

塔者。示現如來舍利住持故。量者。方便示現一切佛土清淨莊嚴。是出世間清淨。無漏善根所生。非是世間有漏善根之所生也。略者。示現多寶佛身一體攝取一切諸佛眞法身故。住持者。示現諸佛如來法身自在力故。示現無量佛者。示現彼此所作諸業無差別故。遠離穢者。示現一切諸佛國土平等清淨故。多寶者。示現一切諸佛國土同實性故。同一塔坐者。示現化佛非化佛法佛報佛等皆爲成大事故。(六一八頁)

以上の本文を、鉄眼版、『縮刷蔵』、『正正蔵』と対照すると左の如くなる。ここでは、上部に右論文所引の文を示し、それと異なる箇所のみを矢印の下に記した。波線は異なる箇所を示す。

- ① 一名無量義者↓一名無量義經者(鉄眼版・『縮刷蔵』・『正正蔵』)
- ② 八名一切諸佛祕密處處者↓八名一切諸佛祕密處處者(鉄眼版・『縮刷蔵』・『正正蔵』)
- ③ 有頻婆羅阿閼婆等偈故↓有頻婆羅阿閼婆等舒盧迦偈故(鉄眼版)
↓有頻婆羅阿閼婆等舒盧迦故(『縮刷蔵』・『正正蔵』)
- ④ 得有乳酪生酥熟酥及以醍醐↓得有乳酪生酥熟酥乃以醍醐(鉄眼版)

↓得有乳酪生酥熟酥及以醍醐（『縮刷蔵』・『正蔵』）

⑤ 過彼城已↓過後城已（鉄眼版）

⑥ 修集無量種種功德↓修習無量種種功德（鉄眼版）

⑦ 未熟故↓根未熟故（鉄眼版・『縮刷蔵』・『正蔵』）

⑧ 不與授記↓如來不與授記（鉄眼版）

⑨ 菩薩與授記者↓應化聲聞是大菩薩與授記者（鉄眼版）

⑩ 以佛佛法身↓以佛法身（鉄眼版・『縮刷蔵』・『正蔵』）

⑪ 一者示現應佛菩提↓一者示現應化佛菩提（鉄眼版）

⑫ 不難衆生界↓不離衆生界（鉄眼版・『縮刷蔵』・『正蔵』）

⑬ 示現如來常命↓示現如來命常（『縮刷蔵』・『正蔵』）

右の本文の箇所においては、『縮刷蔵』と『正蔵』とが本文は全く同じであったため異同はないが、鉄眼版とは少しく語句の異なりがみられることがわかる。④の「略」や、⑦の「熟」、⑫の「難」は誤植の可能性が高いかと思われるが、本論文において依拠したテキストをその相異の少なさという点から考えるならば、『縮刷蔵』あるいは『正蔵』が該当しよう。そして、それは国訳にあたって同テキストが参照されていたことを示唆するものといえる。

正保三年版については、後に対照表を提示し考察を行うが、右諸本に比して最も差異がみられる結果となっており、両論文において依拠したテキストが本版本ではないことは明らかである。また、本論文にて引用された本文と国訳に

おける本文とを対照すると、明らかに相異があることがわかり、底本として依拠したテキストが異なっていたことを物語る結果となっている。だが、その理由について詳細は不明である。

以上のことを踏まえた上において、次に清水国訳と諸本との対照を行い、その異同を確認していくこととしたい。ここでは、正保三年版の底本は何か、如何なる系統によるものであるかという問題をも視野に入れ、まずは正保三年版と諸本―特にここでは、鉄眼版、『縮刷蔵』、『正蔵』の両訳を指す―との対照を行いたい。そしてそこから、清水国訳の指すところの「第一訳」、「第二訳」について検討を進めたい。

その方法として、正保三年版を底本とし、その丁・行によって出拠と異読を示すことにする。²⁴記号の↓は正保三年版と字句が異なること、「無」は当該字句が無いものを表す。また、本文の字体は原則として正字を用いた。以下の語句については、異体字（俗字・略字・音通字も含む）としてその異同の指摘を省略した。慧・恵、辯・辨、世・卍、修・脩、佗・他、嘆・歎、經・逕、鼓・鼓、燃・然、倦・倦、繞・遶、體・躰、華・花、幢・幢。また、正法三年版①と対照を行ったテキストは、清水国訳②、鉄眼版菩提留支訳③、勒那摩提訳④、『縮刷蔵』菩提留支訳④・勒那摩提訳⑦、『正蔵』菩提留支訳⑤・勒那摩提訳⑧の七本である。対照表においては、それぞれ数字をもって示した。このうち、清水国訳は訓読訳であるため私に本文を改めた。なお、本対照表では、対照範囲を方便品釈の前までとした。

三 『法華論』テキストの対照表

		①	本文 ↓ 異読	
1材・1	法華論 婆藪槃豆（此云／天親）菩薩造 ↓〔無〕			
2	妙法蓮華經優波提舍 ↓〔無〕			
	↓ 妙法蓮華經優波提舍卷上			
	↓ 妙法蓮華經憂波提舍卷上			
	↓ 妙法蓮華經論優波提舍卷上			
	↓ 妙法蓮華經論優波提舍			
2	三藏法師菩提／流支奉詔譯 ↓〔無〕			
	↓ 大乘論師婆藪槃豆釋／元魏北天竺三藏法師菩提留支共沙門曇林等譯			
	↓ 大乘論師婆藪槃豆釋／後魏北天竺三藏菩提留支共沙門曇林等譯			
	↓ 大乘論師婆藪槃豆菩薩造／元魏天竺三藏法師勒那摩提共僧朗等譯			
	↓ 婆藪槃豆菩薩造／元魏中天竺三藏勒那摩提共僧朗等譯			
5	令法自利他 ↓ 令法自他利			
5	略出勒伽論 ↓ 略出勒伽辯			
5	歸命過未世 ↓ 歸命過未來世			
	↓ 歸命過去未來世			
⑥		③		
③		④、⑤、⑥		
③		④、⑤、⑥		
⑦、⑧		⑦、⑧		
⑥		④、⑤		
④、⑤		②		
③		⑦、⑧		
②		⑥		
⑦、⑧		④、⑤		
⑥		③		
②		②		
②		③、④、⑤、⑥、⑦、⑧		

3	2	2	1	2才・1	9	9	9	9	5	1才・5	9	8	6
又序分↓序分	文殊師利↓文殊師利菩薩	欲聞法現前↓現前欲聞法	依上說因↓依止說因	所依說法隨順威儀↓依所說法威儀隨順	(無)↓此義應知	明七種功德↓示現七種功德	此法門中↓此法門	此法門中↓此經法門	論曰↓釋曰	轉不退轉法輪↓轉不退法輪	大辨財樂說↓大辯才樂說	(無)↓妙法蓮華經序品第一	現在佛菩薩↓現在一切佛菩薩
					↓應知		↓此法門		↓(無)	轉不退轉法輪	↓一時婆伽婆佛住	↓序品第一	
										論曰	一時佛住	經曰歸命一切諸佛菩薩↓(無)	
										釋曰	一時佛在	妙法蓮華經序品第一	

②、	③	③、	②、	③、	⑥、	③、	③、	⑥	③、	⑦、	③、	⑥、	②、	⑥	③	③、	②、	③、	(⑦、⑧は婦敬頌無)	⑥
③、		④、	③、	④、	⑦	④、	④、		④、	⑧	④、	⑦、	③、			⑥	④、	④、		
④、		⑤、	④、	⑤		⑤	⑤				⑤、	⑧	④、				⑤	⑤、		
⑤		⑥、	⑤、							⑥			⑤、					⑥、		
		⑦、	⑥										⑥、					⑦、		
		⑧											⑦、					⑧		
													⑧							

7	7	6	6	6	5	4	4	3	10	9	9	8	7	7	
故名↓是故名爲	皆悉善知↓皆善知	是勝智者↓是勝智 ↓復聲聞	又復聲聞↓又聲聞 ↓復聲聞	皆知識故↓皆識知故	大臣人民帝釋天王梵天王等↓大臣人民帝釋梵天王等	第一彼岸↓彼岸	大阿羅漢等↓大羅漢等	↓心解脫	已速得已利↓以速得已利	已捨離故↓已捨故	已應作↓以應作	已成辨故↓已成就故 ↓已成故	煩惱怨敵↓煩惱之怨敵	已得對治↓已盡對治 ↓應作者已作	應作者作

『法華論』版本の研究(桑名)

③、	②、	⑦、	⑦、	②	③、	⑦、	②	②、	⑦、	③、	②	③、	⑦、	③、	⑦、	②、	③、	⑦、	⑥、	③、
④、	⑦、	⑧	⑧		④、	⑧		③、	⑧	④		④、	⑧	④、	⑧	③、	④、	⑧	⑦、	④、
⑤	⑧				⑤、			④、				⑤	⑤、			④、	⑤		⑧	⑤
					⑥、			⑤、					⑥			⑤、				
					⑦、			⑥、							⑥					
					⑧			⑦、												
								⑧												

4ウ	4ウ																				
1	1	10	9	9	8	7	7	2	9	9	9	8	8	8	7	7					
斷德功德↓得功德	何等爲十↓〔無〕	應知示現↓示現	一切諸衆生↓一切衆生	諸衆生↓諸衆	諸衆生↓諸衆	勝功德↓功德	諸神通↓諸通	禪淨心↓禪淨心	觀察諸法↓觀察法	何等十五↓〔無〕	十五種應義↓十五種義	阿羅漢名之爲應↓羅漢名	皆是阿羅漢者↓〔無〕	初句是摠↓初句總	十六句中↓十六句	皆是阿羅漢↓皆是羅漢	摠別相門↓摠別門				
				↓衆								↓皆是羅漢者		↓十六句等		↓是故名					

③、	⑦、	⑦、	⑦、	⑦、	③、	⑥、	③、	③	③、	⑦、	⑥、	⑦、	⑦、	③、	⑦、	⑥	③、	⑦、	⑦、	⑥
⑥、	⑧	⑧	⑧	⑧	④、	⑦、	④、		④、	⑧	⑦、	⑧	⑧	④、	⑧		④、	⑧	⑧	
⑦、					⑤、	⑧	⑤、		⑤、		⑧		⑤				⑤、			
⑧					⑥		⑥、		⑦、								⑦、			
							⑦、		⑧								⑧			
							⑧													

						5材							
5		5	4	2	1	1	10	9	7	7	5		
攝義示現應知何等二門↓攝應知		有十三句功德↓有十三句	諸菩薩功德成就者↓彼諸菩薩功德成就者	上上功德↓上下功德	己利↓己利故	重擔↓重擔故	恭敬故↓恭敬	過愛故↓過愛	如來故↓如來	謂依法↓謂能依法	如來教行↓如來教作		
		↓彼十二句	↓菩薩功德成就者				↓過受故		↓依法		↓德功德		
		↓彼十三句	↓得諸菩薩功德成就者										
		↓十三句功德	↓彼諸菩薩										

⑦	⑦	⑥	④	③	②	⑦	⑥	③	②	⑧	③	③	③	⑦	③	③	⑦	③	④	④
⑧	⑧		⑤			⑧		④			④	④	④	⑧	④	④	⑧	④	⑤	⑤
								⑤			⑤	⑤	⑤		⑤	⑤		⑤		
										⑥	⑥							⑥		

『法華論』版本の研究(桑名)

6	6	4	2	1	1	6才 1	9	9	8	5	2	5才 1	10	9	8	7	
復更↓又復更	境界者易解↓〔無〕	所作應作↓作所應作	八地以上↓八地已上	應作所作↓作所應作	於何等境界↓何等境界	因何等↓以何等	能度無量↓能度無數	名稱普聞無量世界↓〔無〕	應作所作住持↓作所應作	入彼彼法↓入彼岸法	以已身心↓以身心	不退轉↓不退	大辯財樂說↓大辯才樂說	應知何等爲十↓此義應知何等爲十	↓十種	有十種↓有十重	皆於阿耨多羅↓皆得阿耨多羅
③、	③、	③、	②、	③、	⑦、	③、	②、	②、	③、	②、	②、	⑥、	②、	⑦、	③、	③、	②、
④、	④、	④、	③、	④、	⑧、	④、	③、	④、	④、	③、	③、	⑦、	③、	⑧、	④、	④、	⑦、
⑤、	⑤、	⑤、	④、	⑤、	⑤、	④、	④、	⑤、	⑤、	④、	④、	⑧、	④、	⑤、	⑤、	⑥、	③、
⑥、	⑥、	⑤、	⑤、	⑤、	⑤、	⑤、	⑦、	⑦、	⑦、	⑤、	⑤、	⑤、	⑤、	⑤、	⑤、	⑤、	④、
		⑦、	⑦、	⑦、	⑦、	⑦、	⑦、	⑦、	⑦、	⑦、	⑦、	⑦、	⑦、	⑦、	⑦、	⑦、	⑦、
		⑧、	⑧、	⑧、	⑧、	⑧、	⑧、	⑧、	⑧、	⑧、	⑧、	⑧、	⑧、	⑧、	⑧、	⑧、	⑧、

5	4	3	2	2	2	1	1	1	1	6 ⁷ ・1	10	9	8	8	7	
我依度衆生心教化 ↓我依衆生心教化	何等能辨 ↓何等境界能辨	何等境界 ↓何等境界	三攝功德 ↓攝功德	功德義 ↓功德	轉輪王太子 ↓轉輪王子	得受佛位 ↓得佛受位	轉不退轉 ↓不退轉	於第十地 ↓第十地	自在智故 ↓自在智	於第九地 ↓於九地	於第九地 ↓於九地	不能動故 ↓不能動	下者 ↓下功者	八地者 ↓八地中	謂八地中 ↓謂八地中	諸功德 ↓功德
															復	

⑥	③	⑥	⑦	②	⑦	⑦	③	⑥	③	③	⑦	⑥	③	③	⑥	⑦	⑥	③	⑥	⑦
⑦	④		⑧	③	⑧	⑧	④	⑦	④	④	⑧	⑦	④	④		⑧		④	⑦	⑧
⑧	⑤			④			⑤	⑧	⑤	⑤		⑧	⑤	⑤				⑤	⑧	
				⑤			⑥		⑥				⑦							
				⑥					⑦				⑧							
				⑦					⑧											
				⑧																

7つ・2	10	10	9	8	8	7	7	6	5	4	4	7つ・2	9	8	8	7
祕密處↓密處	一切諸佛之藏↓一切佛之藏 ↓一切佛藏	唯佛如來知故↓唯佛知故 ↓如來知故	依佛如來↓以依如來	隨順法器善↓隨器法	以爲教化↓爲教化	隨順衆生↓隨衆生 ↓大乘門	大乘法門↓大乘門中善成就故	大方廣↓大方廣經	於三藏叡勝妙藏此法門中善↓三藏中最妙勝藏 ↓彼甚深妙境界法故甚深	彼甚深法妙境界故彼甚深法↓彼甚深法妙境界法故彼甚深法	法門方便↓法門	何等十七云何顯示↓〔無〕	一者衆↓一者四衆	有四種↓四種	四威儀↓威儀	智所攝↓智攝
⑦、 ⑧	⑦、 ⑧	⑥ ⑦、 ⑧	③、 ④、 ⑤	③、 ④、 ⑤	⑦、 ⑧	⑥、 ⑦、 ⑧	③、 ④、 ⑤	③、 ④、 ⑤	⑦、 ⑧	⑥ ⑦、 ⑧	②、 ③、 ④、 ⑤、 ⑥、 ⑦、 ⑧	⑦、 ⑧	⑦、 ⑧	③、 ④、 ⑤、 ⑥、 ⑦、 ⑧	③、 ④、 ⑤、 ⑥、 ⑦、 ⑧	⑦、 ⑧

2	1	10	10	8	7	7	6	6	4	4	4	3	3	3	2	2	2
此法門↓以此法門	彼二乘道↓二乘	以此法門↓此法門	諸善法↓法	不毀壞↓不敗壞	眞如↓眞實	舍利經↓舍利	障礙↓障	以此法門↓此法門	能成諸佛↓能成	聞此法門↓以此法門	諸佛道場↓諸佛之道場	能成諸佛大菩提↓能成佛菩提	聞此法門↓〔無〕	諸佛經者↓諸佛者	不授與↓不受與	衆生等非受法器↓衆生非法器	以根夫熟↓以根未熟
			↓不壞										↓不與		↓根未熟		

③	⑦	⑦	⑦	⑦	③	③	③	⑦	⑦	⑦	③	③	⑦	②	⑦	⑦	②
④	⑧	⑧	⑧	⑧	④	④	④	⑧	⑧	⑧	④	④	⑧		⑧	⑧	⑧
⑤				⑤	⑤	⑤				⑤	⑤						④
⑥				⑥		⑦					⑥						⑤
						⑧											⑥

8	7	7	6	6	5	4	4	4	3	3	2	2	1	87	10
佛說此經已 ↓說此經已	二爲↓二者爲	不見對治↓示現對治	一爲隨順↓一者隨順 ↓一者爲隨順	復有示現二種↓有二種	諸障礙↓障 ↓諸障	何等爲二↓〔無〕	二種法↓二種 ↓三昧	故以三昧↓以三昧	一者↓一	何等法↓何等何等法	所依說法隨順威儀↓依所說法威儀隨順	如是等故↓如是等	法門者是摠餘句是別故↓法門是總餘句是別	↓偈	舒盧迦 ↓舒盧迦偈

⑦、	⑥	⑥、	⑦、	⑦、	⑥	③、	⑥、	③、	③、	③、	④、	③	⑦、	③、	③、	⑦、	③、	⑦、	③、	②、
⑧		⑦、	⑧	⑧		④、	⑦、	④、	④、	④、	⑤		⑧	④、	④、	⑧	④、	⑧	⑥	④、
		⑧				⑤、	⑧	⑤	⑤	⑤、			⑤	⑤	⑤					⑤
						⑥、				⑦、										
						⑦、				⑧										
						⑧														

5	4	4	4	2	2	2	1	9a 1	10	10	10	9	9	9	8
次示現↓次爲示現	先爲大衆示現↓先示現	諸世界中種種事故↓他方諸世界中種種諸事故	如來放大光明↓放大光明	如來今者應爲我說渴仰欲聞生希有心↓大衆見已生希有心渴仰欲聞生如是念如來今者應爲我說故	不可思議事↓不思議事	彼諸大衆現見↓爲諸大衆示現	乃至↓次第乃至	曼陀羅華↓曼荼羅華	事等故↓事如是等故	歡喜↓歡欣	振動↓震動	三者↓三	二者↓二	↓三昧等	結跏趺坐↓結加趺坐
③、 ④、 ⑤、 ⑥	②、 ⑦、 ⑧	③、 ④、 ⑤、 ⑥	⑦、 ⑧	⑥	③、 ④、 ⑤	③、 ④、 ⑤	③、 ④、 ⑤	②	③、 ④、 ⑤	⑥	②、 ③、 ④、 ⑤、 ⑥、 ⑦、 ⑧	⑦、 ⑧	⑥、 ⑦、 ⑧	⑦、 ⑧	③、 ④、 ⑤、 ⑥

7	7	6	5	4	4	4	3	3	3	2	1	9 1	6	5	5	
何等現義↓何等義	神變相↓神變相者	隨順於法↓隨順法	一人者↓一人	現前欲聞法↓欲聞現前法 ↓欲聞現前	自此已下↓自此以下	當自推取↓自當推取 ↓當推取	如經所說↓如經中說	應知↓此義應知	四攝取法↓四攝法	乃至↓次第乃至	修行↓明修行	食住↓食	種種無量↓種種量 ↓深密法故	得果故↓得果	甚深微密法故↓甚深微密之法 ↓甚深微密之法故	此法門中↓此法門

『法華論』版本の研究(桑名)

③	③	⑦	⑦	④	③	③	⑦	④ ⁽²⁾	⑥	③	②	③	⑦	③	③	②	⑦	⑥	③	⑦
④	④	⑧	⑧	⑤		④	⑧		⑦	④	③	④	⑧	④	④	③	⑧		④	⑧
⑤	⑤					⑤			⑧	⑤	④	⑤		⑤	⑤	④				⑤
⑥	⑥					⑥				⑥	⑤	⑥		⑥	⑦	⑤				
⑦	⑦					⑦					⑥			⑦	⑧	⑦				
⑧	⑧					⑧					⑦			⑧		⑧				
																				⑧

7	7	6	6	6	5	3	11才 3	10	8	6	5	4	4	3	3	3	
謂有疑者爲↓謂疑者	名爲↓爲	何者↓何等	欲說大法↓欲論大法	欲示現↓示現	大法燈↓大法炬	欲論大法↓欲轉大法輪	應知↓此義應知何等爲人 ↓此義應知何等爲八	轉法輪↓法輪	甚深意↓意甚深	成就十種事者何等爲十↓何等名爲成就十事	過去世↓過去	現見過去果相者↓云何現見過去果相謂	↓諸佛國土中處處修行	諸佛國土中修	文殊師利自見己身曾於彼彼↓自見己身於彼	諸佛國土中修	彌勒菩薩↓彌勒

⑦、	⑥、	③、	③、	⑦、	⑥	⑦、	④、	③	⑦、	③、	③、	⑥、	③、	⑥	③、	②	⑦、	⑥	③、	⑥、
⑧	⑦、	④、	④、	⑧		⑧	⑤		⑧	④、	④、	⑦、	④、		④、	⑧		④、	⑦、	⑧、
	⑧	⑤、	⑤、							⑤	⑤	⑧	⑤、	⑤				⑤	⑧	⑧
		⑦、	⑥									⑥								
		⑧																		

4	4	1	1	117 1	10	10	9	9	8	8	8	8	7
成就者說大教故↓成就者	章句意↓章句義	取一切智現見↓令彼進取一切種智得現見	一切種智得現見↓一切智得現見 ↓一切智現見	令進取↓令彼進取	取上上↓進取上上	令進取↓令彼進取	大法鼓者↓大法鼓 ↓菩薩密	二謂菩薩密↓二者菩薩微密 ↓二者菩薩密	一謂聲聞密↓一者聲聞微密 ↓一者聲聞微密	微密↓密	根淳熟↓根熟	彼智身↓智身	已斷疑者↓以斷疑者

『法華論』版本の研究(桑名)

③、	③	③、	⑦、	②	⑦、	③、	③、	③、	⑦、	⑦、	⑥	③、	⑦、	⑥	④、	③	⑦、	⑥、	⑦、	②
④、		④、	⑧		⑧	④、	④、	④、	⑧	⑧		④、	⑧		⑤		⑧	⑦、	⑧	
⑤、		⑤、			⑤、	⑤	⑤				⑤							⑧		
⑥		⑥			⑥															

2	乃至↓次第乃至	③、④、⑤
4	乃至↓次第乃至	③、④、⑤
5	文殊自身↓自身	③、④、⑤、⑥、⑦、⑧
5	乃至↓次第乃至	③、④、⑤
6	彼過去事↓過去事	⑦、⑧
6	復示現得彼法具足故↓又復示現今得彼法皆具足故	②、④、⑤
	↓又復示現今得彼法具足故	
	〔無〕↓又依義攝三故一與說故如經今佛世尊欲說大法等故二成如實說故如經我於過去會	③
	見等故三令待說故如經諸人今當知等故	④、⑤
	〔無〕↓自此已下示現所說法因果相應知	③、④、⑤、⑥

おわりに

以上、方便品釈の前までを対照範囲として、正法三年版と、清水国訳、鉄眼版菩提留支訳・勒那摩提訳、『縮刷蔵』菩提留支訳・勒那摩提訳、『正正蔵』菩提留支訳・勒那摩提訳の七本のテキストとの対照を行った。右の対照によって判然とするように、正法三年版と清水国訳との字句の相異は、他の六本のテキストと比べて極めて少なく、本稿においては冒頭より問題としていた正法三年版一丁表の「經曰歸命一切諸佛菩薩」の一文の有無や一丁裏の「論曰」をはじめとして、正法三年版と清水国訳のみが合致し、他の六本のテキストとは字句が異なる箇所が少なくない。もちろん、清水梁山氏が「主として第二訳の本に拠れども亦第一訳をも参照し、及び更に二本の異本をも考へて、務めて意

義の通利なるものを取れり⁽²⁶⁾と断っているように、正法三年版と清水国訳両者に異なりはみられるが、清水梁山氏が底本として用いた「第二訳」（菩提留支訳）とは、すなわち正保三年版（菩提流支訳）であることがわかるのである。一方、この正法三年版とともに参照した「第一訳」（勒那摩提訳）、および異本がどのテキストを指すかは、右の対照からは断定しかねるところであるが、鉄眼版よりも『縮刷蔵』、『正正蔵』の可能性が高いということが指摘できよう。これは国訳に先立って発表された論考において用いたテキストとの関係からも同様のことがいえるものである。

また、正保三年版の版本自体に着目するならば、右の対照表において『縮刷蔵』の菩提留支訳、勒那摩提訳それぞれとの相異箇所はほぼ同数であるが、十二丁裏の序品積の末尾をみる限りにおいては、正保三年版は菩提留支訳ではなく、勒那摩提訳の特徴を有するテキストであるといえる。それは「又依義攝三故一與說故如經今佛世尊欲說大法等故二成如實說故如經我於過去曾見等故三令待說故如經諸人今當知等故自此已下示現所說法因果相應知⁽²⁹⁾」の文は、現行本において菩提留支訳のみあって、勒那摩提訳にはないからである。したがって、右の対照からは正保三年版は菩提留支訳とはいいながらも、現行本との比較においては、むしろ勒那摩提訳と類似するといえるのである。しかし、そう即断することはできない。右のように、現行本の菩提留支訳と勒那摩提訳両訳における大きな相異点と正保三年版の当該箇所を挙げると左の如くなる⁽³¹⁾。

菩提留支訳 釋曰⁽³²⁾

勒那摩提訳 論曰自此已下示現所說法因果相應知如經⁽³³⁾

正保三年版 論曰自此已下示現所說法因果相應知⁽³⁴⁾

菩提留支訳 與二種法令彼成就何等爲二一與證法二與說法一與證法令成就者謂⁽³⁵⁾

勒那摩提訳〔無〕

正保三年版 與二種法令彼成就何等爲二一與證法二與說法一與證法令成就者謂⁽³⁶⁾

菩提留支訳 示現有八一者塔二者量三者略四者住持五者示現無量佛六者離穢七者多寶八者同一塔坐⁽³⁷⁾

勒那摩提訳〔無〕

正保三年版 示現有八種一者塔二者量三者略四者住持五者示現無量佛六者離穢七者多寶八者同一塔坐⁽³⁸⁾

これより現行本との比較の上においては、菩提留支訳の特徴を有する箇所もあれば、勒那摩提訳の特徴を有する箇所もあり、双方が複雑に混ざり合ったものとなっていることがわかる。したがって、正保三年版、すなわち、寛永二年版より寛文九年の「法華宗門書堂」版に至る版本は現行本とは全くの別系統のテキストであることがより明瞭となる⁽³⁹⁾。

以上の考察より、大藏經所収テキストとは別系統のテキストが、近世日本においては少なくとも寛永二年（一六二五）に古活字版として刊行され、正保三年より整版として刊記部分を改めて刊行されていた。しかもそれは、慶安五年（一六五二）刊行の『科註法華論』、並びに正徳四年（一七一四）刊行の『法華論疏』両書において用いられ補入されていることから、『法華論』の基本テキストとして広く流布していたことが窺えるのである。そしてその流れを受け継ぐ形で、近代初頭の国訳においても同版本が底本として用いられていたのである。

本版本『法華論』は、従来の『法華論』研究においても、また『法華論』末疏の研究においても等閑視されてきた嫌いがあるが、吉蔵以降の『法華論』末疏の依拠したテクストとの関連も含め、『法華論』の研究において極めて大きな資料価値を有するものであると考えられるのである。

注

- (1) 金炳坤・桑名法晃「義寂釈義一撰『法華經論述記』の文献学的研究(1)」（『身延山大学仏教学部紀要』第一五号、二〇一四）三八頁。修正を含む。
- (2) 清水梁山「国訳妙法蓮華経優婆提舍」（『国民文庫刊行会編『国訳大藏経 論部第五卷』国民文庫刊行会、一九二二）二二頁。
- (3) 塩田義遜「法華論の研究」（『樓神』第二八号、一九四三）三一―四頁。
- (4) 金炳坤「流支訳『妙法蓮華経優婆提舍』の古形について」（『婆藪槃豆菩薩造法華論』法華経研究叢書Ⅱ、身延山大学東洋文化研究所、二〇一六）参照。
- (5) また、近年、日本に現存する古写経への注目が高まり、その重要性が論じられている。『法華論』についても複数の古写本の存在を確認することができる。国際仏教学大学院大学学術フロンティア実行委員会編集『日本現存八種一切経対照目録』（国際仏教学大学院大学学術フロンティア実行委員会、二〇〇六、一八四頁）によれば、菩提留支訳については、「聖語藏」、「興聖寺」に上下巻ともに「状態の良い写本」が、「七寺」に上下巻ともに「破損のある写本」が、「金剛寺」に上巻のみ「破損のある写本」が、「新宮寺」に下巻のみ「状態の良い写本」が現存する。また、勒那摩提訳については、「聖語藏」、「七寺」、「興聖寺」、「松尾社」に「状態の良い写本」が現存する。ただ、この菩提留支訳の中、冒頭部分を確認し得た「聖語藏」、「金剛寺」に、Ⅲの「経曰帰命一切諸仏菩薩」の一文は存在しなかった。
- (6) 冠賢一『近世日蓮宗出版史研究』（平楽寺書店、一九八三）二三、八七頁。
- (7) 右同九〇―九一頁。
- (8) 右同九五頁。
- (9) 右同。
- (10) 右同九〇頁。

(11) 右同二六頁。

(12) 岡雅彦他編『江戸時代初期出版年表』天正十九年―明暦四年（勉誠出版、二〇一一）九七頁。

(13) 右同「凡例」(6)頁参照。

(14) 長澤規矩也「叡山活字版について」〔書誌学〕復刊新六号、一九六六、三四頁。

(15) 宗政五十緒『近世京都出版文化の研究』（同朋舎、一九八二）四頁。

(16) 以上が、Ⅲの一文を有する版本となるが、これらのほかにも、近世において出版された天海版大藏経に『法華論』をみることで、
きる。松永知海編『東叡山寛永寺天海版一切経目録』（佛教大学松永研究室、一九九九）には左の如く記載されている（七三頁）。

經典番号五七五 法宝番号五七一

妙法蓮華経論優波提舍論本内広略俱備 大乘論師婆藪槃豆

菩薩造元魏天竺三藏法師勒那摩提共僧朗等訳

一卷 虚十一 三三紙 音釈。正保二年願文。

經典番号五七六 法宝番号五七二

妙法蓮華経優波提舍 大乘論師婆藪槃豆魏北天竺三藏法

師菩提留支共沙門曇林等訳

妙法蓮華経優波提舍

一卷 堂一 一六紙 音釈。

また、『江戸時代初期出版年表』には左の如くある（二九四頁）。

◎妙法蓮華経論優波提舍論本内広略俱備（天海版） 一卷

〔著者〕婆藪槃豆菩薩造、（元魏）勒那摩提僧朗等共訳

〔刊記〕正保二年乙酉曆三月十四日／経館分職林氏倅肅花溪居士／使劄嗣氏而鈔之梓

〔所蔵〕『松永目録』 図版575

右『松永目録』とは、松永知海編『東叡山寛永寺天海版一切経願文集』一九頁掲載の図版を指している。

天海版は、寛永十四年（一六三七）より慶安元年（一六四八）にかけて刊行した日本最初の「一切経」である。底本は宋思溪版藏経で、一部は元杭州版と明万曆版を用い、木活字を使用する。一紙二十四行、一行十七字、六行ごとに少し広めに行間をとり、

『法華論』版本の研究（桑名）

『法華論』版本の研究（桑 名）

装訂を折本とする。第十二行と第十三行との間の版心には経典名と千字文卷次と丁数とを記している（井上宗雄他編著『日本古典書誌学辞典』岩波書店、一九九九、四〇七頁）。

日本における大藏經の開版は、右の天海版大藏經、それに続く鉄眼版大藏經があるが、それに先立つ大藏經の開版として宗存版の存在がある。これは、高麗版を主要底本とし、慶長十八年（一六一三）から寛永元年（一六二四）にかけて刊行されたものである。一四〇種の版本が現存するが、その中に『法華論』はなく、また全藏残っていないため、果たして一切經の刊行を完遂したか定かではない。ただそこに『法華論』が含まれていたとしても、高麗版を底本とする宗存版に寛永二年版との直接的な繋がりを求めることはできず、別系統の版本乃至写本の存在を追究する必要がある。

(17) 本文にて挙げたほかに、立正大学図書館には、正保三年版が三本（資料請求番号A七三一〇五、A七三一〇五）、A七三一〇三、A七三一〇四）、寛文九年「法華宗門書堂」版が二本（資料請求番号A七三一〇五、A七三一〇五）所藏される。

(18) 「国訳法華論問題」（『国訳大藏經 論部第五卷』）七頁。

(19) 右同五頁。

(20) 右同六頁。

(21) 『天日本校訂大藏經』往六（弘経書院、一八八五）。本『縮刷藏』は、高麗藏を底本とし、宋・元・明（黄檗藏）を対校本として校合を行っている。

(22) 『日本校訂大藏經』第二二套（蔵経書院、一九〇四）。本『正蔵』は、忍激が建仁寺所藏の高麗再雕本と対校した黄檗藏を底本とする。

(23) 「天親の法華経観」（『大崎学報』第三八号、一九一五）四頁。

(24) ここでは、藤田宏達氏の研究、『浄土三部經の研究』（岩波書店、二〇〇七）、「浄土三部經の日本古写経」（『印度哲学仏教学』第二二号、二〇〇七）を参考にした。

(25) 正保三年版から寛文九年版まで確認し得た版本ではみな「上」の字となっていた。これらの版が同一版木を用いていたことは、すでに本文中にて述べたが、これにより、誤字脱字等の補填は必ずしも行われていなかったことがわかる。また、同箇所は、今回確認し得た全ての寛永二年版においても「上」となっており、ここからも寛永二年版を底本としていたことが窺える。

(26) 前出の「上」と同様、寛永二年版においても「比」となっている。

(27) 本箇所は、寛永二年版では「未」となっていた。

- (28) ④『縮刷蔵』菩提留支訳と⑤『正蔵』菩提留支訳については、本稿で対照を行った範囲においては、本箇所と八丁裏の二箇所のみ異なりで、ほかは異体字の相異が若干みられるのみであった。
- (29) 『国訳法華論問題』(『国訳大蔵経 論部第五卷』)七頁。
- (30) 『正蔵』第二六卷四頁b。
- (31) ここでいう大きな相異点とは、一〇字以上字句が異なる箇所を指す。その箇所が全部で四箇所あり、それをもってどちらの系統に属するか判別し得る基準になるという。金炳坤氏の教示による。
- (32) 『正蔵』第二六卷四頁c。
- (33) 『正蔵』第二六卷一四頁b。
- (34) 一四丁表。
- (35) 『正蔵』第二六卷六頁a。
- (36) 一八丁表。
- (37) 『正蔵』第二六卷九頁c。
- (38) 二九丁裏。
- (39) 近年における清水国訳に対する評価を一瞥すると、次のような指摘がみられる。「近現代においてテキスト自体に対する基礎研究はこれまでのところそう多くはない。近年の本書に対する研究成果では、清水梁山師の国訳ならびに訳注があるくらいであるが、この国訳の不備な点は、底本として菩提留支訳テキストに拠りながら、同テキストの難読部分については何の断りもなくその部分だけ勒那摩提訳を採用している点である。このような恣意的なテキストの用い方がされているので注意が必要である」(藤井教公・池邊宏明ほか「世親『法華論』訳注(1)、『北海道大学文学研究科紀要』第一〇五号、二〇〇一、一二一―一三三頁)。すなわち、菩提留支訳を底本としながらも無断で勒那摩提訳を用い、恣意的なテキストの用い方がなされているとの批判である。これはあくまで現行本の菩提留支・勒那摩提両訳との比較の上における評価であるが、以上の考察より、これは訳者である清水梁山氏自身に問題があるというよりも、清水梁山氏が底本として国訳に用いたテキスト上の問題であるといえよう。
- (40) 金炳坤「流支訳『妙法蓮華経優波提舍』の古形について」においてこれらの対象を提示する予定である。併せて参照されたい。
- (41) 末光愛正氏は「吉蔵の法華論引用に於ける問題」(『曹洞宗研究員研究生研究紀要』第一六号、一九八三)において左の如く述べている。

『法華論』版本の研究（桑名）

吉蔵の参照したものは、現存のものと思つたものであると思える。吉蔵自身は「法華論 是菩提留支所レ出」と述べるのみで、勒那が訳したとは述べていない。又先に述べたごとく「一無前序」直云三経云帰命一切諸仏菩薩」と、帰敬頌のあるものも、ないものも、「経云帰命一切諸仏菩薩」の語句があつたとされる。しかし現存のどの『法華論』にもこの語句は存在しない。この一例をとつても、吉蔵の参照した帰敬頌のない『法華論』は、勒那訳高麗本に似ているが、しかし異つた別本であつたと思える。その意味からして、『法華論』を研究する上では、現存の『法華論』のみに拘泥することなく、更に吉蔵の引用する『法華論』の内容がどうであつたかを参照する必要がある。特に吉蔵の『法華論疏』の場合には、逐語訳であつて、趣意文ではない。この為に吉蔵の参照した流支訳『法華論』の全文が判明する。これにより、現存する『法華論』以外の全く新しい『法華論』が発見された事と同じ意味を有するのであり、その意義は大きい。（一一〇頁）

正徳四年の刊本が、吉蔵の著作時の原形をそのまま留めていると考え、『法華論』翻訳当時の原形をかなり忠実に維持して来たと考えられるならば、『法華論』を研究する場合には、必要欠くべからざる資料価値を有している事になると思える。（一一〇頁—一一一頁）

このように、末光氏は正徳四年の刊本が吉蔵の著作時の原形をそのまま留めていることを前提として論を進めているためにかかると記述となっているが、右において「現存する『法華論』以外の全く新しい『法華論』とされているのは、本稿で論じてきた版本であることはいうまでもない。したがって、本版本と吉蔵の引用する『法華論』を直ちに結びつけることはできないが、その関連性をも含めて、本版本の重要性を認識した上においてさらに研究していく必要性がある。

〈謝辞〉 本稿執筆にあたり、身延山大学仏教学部准教授 金炳坤氏には多くの助言を賜つた。末筆にあたり謝意を表する次第である。

〈キーワード〉 吉蔵、清水梁山、『法華論』、『法華論疏』、正保三年版、法華宗門書堂版